# スペインのワイン協同組合、2026/27年の収穫量を3,400万ヘクトリットルと予測

スペインのワイン生産量は4年連続で3,700万ヘクトリットルを下回る見通し。生産者には新市場の開拓と脱アルコールワインへの対応が求められる

2026年11月12日（木）



スペインのワイン協同組合は、国内外で需要が弱まるなか、再び小規模な収穫を見込んでいる。こうした状況を受け、生産者は商品構成の拡充や新たな買い手の開拓を進めている。

11月11日（水）、サラゴサ県北東部のカリニェナで開かれた業界会合で、Cooperativas Agro-alimentarias de Españaは、2026/27年シーズンのスペイン国内のワインおよびブドウ果汁の生産量が約3,400万ヘクトリットルに達するとの見通しを示した。この予測が確定すれば、スペインでは4年連続で生産量が3,700万ヘクトリットルを下回ることになる。

同団体によると、今回の見通しは、相次ぐ熱波でブドウ畑の収量が減り、例年より大幅に早まった

収穫を受けたものだ。一方で、ブドウの品質は高いとしている。

世界有数のワイン輸出国にとって、生産見通しは厳しい時期に示された。Cooperativas Agro-alimentariasによると、2026年8月までの12カ月間に国内のワイン消費量は8.3%減少し、前シーズンのスペインワイン輸出量も9.4%減った。生産量の減少と需要の軟化が重なれば、飲料業界全体、とりわけスペインが長年主要供給国となってきた輸出市場で、在庫や価格、貿易の流れに影響が及ぶ可能性がある。

同団体は、Cooperativas Agroalimentarias de Aragónの協力とSantander Agroの協賛を得てカリニェナで開催した全国ワイン会議で、こうした課題を取り上げた。各地の協同組合の代表者に加え、業界関係者や専門家ら約100人が参加し、市場の状況や成長が見込める分野について意見を交わした。

Cooperativas Agro-alimentarias de Españaのワイン部門評議会会長、Fernando Ezquerroは、スペインの生産者は新たなチャネルを活用し、国内外でスペインワインの認知度を高め、消費を促す必要があると述べた。特に、十分に活用されていない機会として、海外からの観光客に注目した。

Ezquerroによると、スペインには毎年約1億人の外国人観光客が訪れるが、その多くは世界有数のワイン生産国を訪れているという認識が十分ではない。この認識の隔たりは、観光とワインの販売、ワイナリー訪問、ワイン文化の幅広い発信をより直接的に結びつける余地があると、業界はみている。

Ezquerroはまた、若年層の消費者を取り込むために業界は一段の取り組みが必要だとし、ワインを単なる飲み物ではなく、より広い文化や農村体験の一部として伝えるべきだと述べた。協同組合はその取り組みのなかで、ブドウ畑や生産方法、地域の食文化を新たな消費者に知ってもらう手段として、ワインツーリズムを重視しつつある。

会議の主要テーマの一つは、多角化だった。生産者は、従来のワイン市場だけに頼ることはできず、飲酒習慣の変化に対応する必要があると述べた。議論に上った商品の一つが脱アルコールワインで、協同組合は従来のワインに取って代わるものではなく、革新と成長の可能性をもたらす分野と位置づけた。会議での議論によると、消費者の選択肢を増やし、一般的なワインの飲用場面とは異なる新たな機会を生み出すことが狙いだ。

この戦略は、節度ある飲酒や健康への懸念、ライフスタイルの変化がワイン、ビール、蒸留酒の需要動向に影響を及ぼすなど、飲料市場全体の広範な変化を反映している。ワイン協同組合にとって、低アルコールまたはノンアルコール商品の拡充は、店頭での販売スペースを確保し、そうでなければカテゴリーから離れてしまう消費者にアプローチする手段となり得る。

会議では、2028～2034年の欧州連合（EU）共通農業政策（CAP）の今後についても議論された。予算や支援策をめぐる交渉が進むなか、スペインのワイン用ブドウ生産者にとって直接的に重要な課題だ。同団体は具体的な政策上の決定事項を発表しなかったものの、生産者が気候変動の影響、市場の変動、収益性への圧力に直面する時期に、次期枠組みが業界にとって重要になると述べた。

国際市場も大きな焦点となった。協同組合は、より高い成長が見込める国を見極め、海外市場におけるスペインワインの地位を高めようとしている。輸出業者が海外販売量の最近の落ち込みからの回復を目指し、既存市場の厳しい状況に適応しようとするなかでの取り組みだ。

Cooperativas Agro-alimentarias de Españaは398の協同組合ワイナリーを代表しており、同団体によると、これらのワイナリーはスペインのワイン総生産量の約70％を占める。その規模を踏まえると、カリニェナで議論された動向は、国内ワイン業界の広範な部分が直面する課題を映し出している。

最新の予測からは、ブドウの品質が良好であっても、スペインの生産者が2026/27年シーズンを楽観できない状況で迎えることがうかがえる。収穫量の減少、国内消費の落ち込み、輸出の低迷により、協同組合には従来のワイン販売だけに頼らず、新商品や新たな消費者、新市場に活路を見いだす圧力が強まっている。